エピソード76
お父さんが腹痛を訴える子どもに付き添ってきます

このエピソードでは、初任２０代男性の先生の経験を紹介します。

ジュリさん
教師を目指して勉強中

先生は、初任で担任外なんですね。

はい、子どもたちのことを理解できるようになりたいと、登校時に子どもたちを玄関で出迎えるようにしています。

出迎え場面でかかわることになったのが鈴さんです。鈴さんは中学年の女児で、明るい性格、一方で出来る自分で居たいという思いも強いようです。

鈴さんは進級して、学校にて「おなかが痛い」と腹痛を訴えることが多くなりました。本人もなぜおなかが痛いのかはわからないという状況です。そこで、毎日玄関で子ども達を迎えていた私が、鈴さんの異変に気付いてかかわるようになりました。

腹痛は登校時に訴えることが多いのですか。

腹痛は毎日あり、朝は登校を渋り、学校では腹痛でどうしてよいのかわからなくなう場面もありました。お父さんが付き添って登校することが多いのですが、お父さんの話では夜は寝つきが悪いというような状況でした。

お父さんが、先生にお話を聞かせてくれたんですね。

はい、私は担外であり、自分の学級の児童ではないということで、どこまで自分が出ていいのか悩む場面も多々ありました。また、初任であるということから、自分の発言力の無さも日々実感していました。でも、鈴さんの担任が鈴さんのことを気にかけることが少ないようにみえたので、「自分が関わることで少しでも鈴さんが良くなったら」という気持ちも強くありました。

そうですね、悩みますね。

鈴さんの様子を継続して見ていると、他の人が怒られているのを見たり、別の人が悪口を言われているのを見たり、自分がわからない問題を突然当てられたりしたときなどに腹痛の症状が出るようでした。担任の先生に不安感をもって、そこからくる身体の不調ではないかな‥とも思えました。

他の先生に相談しましたか。

はい、相談しました。お父さんは、担任にはあまり理解してもらえないと担任が対応することに難色を示したので、私は困っていまい、自分の指導官である主幹教諭に相談することにしました。主幹教諭がお父さんの対応について、担任と教頭先生に相談してくれることになりました。それから、スクールカウンセラーや養護教諭ともよくお話をするようにして、日々の鈴さんの様子を伝えたりしながら、情報共有を図れるように努めています。

そうでしたか。

ジュリさんの気づき

若い先生が、担任ではない子どもとのかかわり、その保護者とのかかわり、担任の先生とのかかわり…という複雑な関係をもつことになり、とても難しい立場に身をおくことになる場合があるんですね。このような状況では、他の先生に相談することが大切なんですね。

お・し・ま・い

若い先生の保護者支援

ジュリさん

＜掲載してあるエピソードはエデュサポネットメンバーの経験をもとにした架空のエピソードです。＞

イラスト　尾上樹里
（北海道教育大学 大学院生）

COPYRIGHT © 2024 UEKI Katsumi, HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION all rights reserved.